

## 狹残行宮における大伴家持詠について：天平十二年聖武行幸時の伊勢路の萬葉詠から

著者	廣岡 義隆
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	16
ページ	35-45
発行年	2005-06-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6624">http://hdl.handle.net/10076/6624</a>

# 狭残行宮における大伴家持詠について

——天平十二年聖武行幸時の伊勢路の萬葉詠から——

廣岡 義隆

○キーワード——韻尾地名音、<sup>ツヅ</sup>佐々良<sup>くろべ</sup>久留倍遺跡、猪名部の匠、熊野船

## 一、はじめに

『萬葉集』卷第六に、天平十二年（七四〇）の聖武天皇行幸関  
係歌八首が収められている。本稿はこの歌群中の「狭残」での  
家持詠を中心に考察するが、関連上、属する歌群と天平十二年  
の行幸行程について見ておきたい。まずはその関係歌群八首を  
掲げる。

十二年庚辰冬十月 依大宰少貳 藤原朝臣廣嗣 謀反發軍  
幸于伊勢國之時

河口行宮 内舍人大伴宿祢家持 作歌一首

河口之野邊尔廬而夜乃歷者妹之手本師所念鳴（6・1019）

天皇御製歌一首

妹尔戀吾乃松原見渡者潮干乃瀧尔多頭鳴渡（6・1030）

右一首今案 吾松原在三重郡 相去河口行宮遠矣 若疑

御在朝明行宮之時 所製御歌 傳者誤之歟

丹比屋主真人歌一首

後尔之人乎思久四泥能崎木綿取之泥而好往跡其念

（6・1031）

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河口

行宮還京 勿令從駕焉 何有詠 思泥崎作歌哉

狭残行宮 大伴宿祢家持 作歌二首

天皇之行幸之隨吾妹子之手枕不卷月曾歷去家留

（6・1032）

御食國志麻乃海部有之真熊野之小舩尔乘而輿部傍所見

（6・1033）

美濃國多藝行宮 大伴宿祢東人 作歌一首  
從古人之言來流老人之變若云水曾名尔負瀧之瀨

(6・10三四)

大伴宿祢家持 作歌一首

田跡河之瀧乎清美香從古官仕兼多藝乃野之上尔

(6・10三五)

不破行宮 大伴宿祢家持 作歌一首

關無者還尔谷藻打行而妹之手枕卷手宿益乎 (6・10三六)

〔萬葉集〕卷第六

この一連八首の前に位置するのは、天平十一年(前年)の大伴坂上郎女作の一首である。また、一連八首に続く歌は三年後の天平十五年の久迹京においての詠歌となっている。そうした歌に挟まれる形で一連八首があり、この八首は、

十二年庚辰冬十月依大宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發軍幸于伊

勢國之時

という題詞で括られて存在している。当稿で取り上げる歌はこの八首中に位置している。

まずこのことを確認しておきたい。

## 二、『続日本紀』から

ついで、『続日本紀』(新日本古典文学大系本)でこの行幸に関わ

る個所について確認した。一々の引用は省くが、その記事を確認する中で、気付いたことがある。

一〇月二十九日……………	堀越頓宿……………	1泊
一〇月三十日(大月)……………	名張郡……………	1泊
十一月一日……………	安保頓宮宿……………	1泊
十一月二日……………	河口頓宮……………	10泊
十一月二日……………	菟志郡宿……………	2泊
十一月四日……………	赤坂頓宮……………	9泊
十一月三日……………	朝明郡……………	2泊
十一月五日……………	石占頓宿……………	1泊
十一月六日(小月)……………	当伎郡……………	4泊
十二月一日……………	不破頓宿……………	5泊

即ち、「頓宮」の「宮」と「宿」とには違いがあるのではないかとということである。「河口頓宮」や「赤坂頓宮」には、一〇泊とか九泊と多い日数の宿泊がある。また「〇〇郡」とあるのは郡家での宿泊ではないかと愚考した。『風土記』においては「郡家」のことを略して「〇〇郡」と称するのが専らであるからである。右の件について山中章氏から、仁藤敦史氏に先行研究があるとの教示を受けた。即ち、以下がそれである。

……郡に対して「到頓宿」という表記が多く見られ、とりわけ菟志郡河口頓宮と菟志郡が区別されていることは、単に行列が郡を経過したことだけではなく、菟志郡家に宿泊したことを示していると推測される。…中略…以上に

よれば、頓宮以外の仮宮としては郡家や駅家が活用されたことが想定される。

(注1)

従いたい。当初、発表題中に「聖武彷徨」の語を入れていたが、出発十月二十九日の一〇日前に「造伊勢国行宮司」を任じており(十月十九日、未確定な東行ではなく、行路は充分に策定されての旅であつたことが理解出来るのである。このことについて、瀧浪貞子氏は、

……総勢四百人にもものぼるといふ多人数による大移動であつた。…中略…はじめから数日間程度の離京といつたぐいのものでなかつたことは明白である。…中略…聖武天皇が、壬申の乱における大海人皇子の行動を意識し、それを追体験しようとしていたことはまず間違いないであろう。

(注2)

と指摘していることは肯われるのである。

この『続日本紀』の記録に見られる行程と『萬葉集』に見られる地名(地名は「鈎括弧」で括った)とを重ねると次のようになる。ただし、その左注は萬葉集編者(後人)のコメントに当たるので、別に考察し、この一覧には掲げない。

『萬葉集』に見られる地名

『続日本紀』の記録

- |                      |            |
|----------------------|------------|
| ①「伊勢」國・「河口」行宮(一〇二九題) | 河口頓宮(11/2) |
| ②「河口」之野邊(一〇二九歌)      | 河口頓宮(11/2) |
| ③松原・潮干乃瀧(一〇三〇歌)      |            |
| ④「四泥」能碕(一〇三二歌)       |            |

⑤「狹殘」行宮(一〇三二・三題)

⑥御食國「志麻」乃海部・真熊野之小舩(一〇三三歌)

⑦「美濃」國「多藝」行宮(一〇三四題) 当伎郡(11/26)

⑧瀧之瀬(一〇三四歌) 当伎郡(11/26)

⑨「田跡」河之瀧・「多藝」乃野(一〇三五歌) 当伎郡(11/26)

⑩「不破」行宮(一〇三六題) 不破頓宿(12/1)

⑪關(一〇三六歌) 不破頓宿(12/1)

③⑥の間が『続日本紀』の行程と対応しない。

③歌については、

右一首今案 吾松原在三重郡 相去河口行宮遠矣 若疑問在朝明行宮之時 所製御歌 傳者誤之歟

という左注が付されている。

これについては、吉井巖氏が以下のように言及している。

左注筆者は、一〇二九題詞の河口行宮をこの御製歌(一〇三〇番歌)にまで関係させてしまったために、疑問を生じたのである。とすれば、伊勢行幸に関連する作を集め並べ、これらに題詞を付した人(巻六の編者)とは関連なく、他の人が後にこの左注を付したものと考へなければならぬ。このことはすでに考に「此小注は必後人の書添しなり。家持卿從駕にてうけ給はりし御製歌に何ぞかかる疑しき事のあらんや。」と直截に述べられている。(注3)

この左注の意味するところは、次の天皇御製歌、  
妹尔戀吾乃松原見渡者潮干乃瀧尔多頭鳴渡(6・一〇三〇)

の第二句「吾乃松原」を「あかまつばら」と訓み、その「あかまつばら」(赤松原)について、「吾松原」(あかまつばら)と比定して、「吾松原ハ三重郡ニ在リ。河口行宮ヲ相去ルコト遠シ。云々」と、萬葉集の或る段階の編者がコメントしたものであり、それには

三重郡赤松原百町。開八町、未開田代九十二町。四至(東上無清泉、南申社山道、北郡堺道、西山之隈) (注4)

という『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』の典拠があり、確かな根拠によって言及していることになるが、それは第二句の「吾乃松原」を「あかまつばら」と訓んだ上でのことであり、この第二句「吾乃松原」については、

天平二年庚午冬十一月大宰帥大伴卿被任大納言(兼帥/如舊)上京之時倭從等別取海路入京 於是悲傷羈旅各陳所心作歌十首(内、冒頭詠)

和我勢兒乎安我松原欲見度婆安麻乎等女登母多麻藻可流美由(17・三八九〇)

右一首三野連石守作

の歌から、

妹に恋ひ吾の松原ゆ見渡せば潮干の渚にたづ鳴き渡る

と訓んで序歌と見るのがよく、地名(固有名詞)は詠み込まれておらず、単なる「松原」という普通名詞が詠み込まれている歌に過ぎないということ、かつて論述したところである(注5)。現在一般にこの第二句「吾乃松原」は「あがのまつばら」と

訓まれているが、助詞「が」の下に助詞「の」を接続する読みはあり得ないことについても同様に言及した。

以上により、この③歌については、「松原」「潮干の渚」という限定のみとなり、その詠作地をどの地点と限定出来るものではない。『続日本紀』に見られる行程、河口頓宮く老志郡宿く赤坂頓宮く朝明郡く石占頓宿く当伎郡からすると、可能性のある詠作地は、老志郡から鈴鹿郡赤坂頓宮までの間における一志から安濃にかけての海岸付近ということになるうか。

また④歌については、

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉

という作者についての左注があるが、これについては現在、題詞に示された「丹比屋主」は「丹比家主」の誤りとする解釈『萬葉集古義』『萬葉集注釈』で落ち着くことになる。その詠作地の「四泥能埒」については、四日市市大宮町の志氏神社が存する高台と一般に考えている。この地について、さしたる根拠というほどのものはないが、異説が存在しないというのが現状である。

岡田登氏は、

阿倉川町から羽津町にかけて志氏我野あるいは志根我野と言われていた洪積台地先端付近(この台地上の羽津町には、延喜式内社の「志氏神社」が鎮座し、境内には碧玉製車輪石や硬玉製勾玉の出土した四世紀後半頃的前方後円墳(径約三〇メートルの後円部のみ残存)、志氏神社古墳が所在する)にあたり、『万葉集』

の「四泥の崎」を考える上で注目される。また、前述した三重庄の東の四至である「布沼雪上埼」は難訓で、南の「遠河」以外の北・西の四至に誤字があるとする、この東も字形の類似から「市泥」或は「市泥野」の誤りであったことも考えられ、三滝川と海蔵川との合流点付近の自然堤防（図3…略）を「市泥野上埼」、近世東海道の走る自然堤防を、「下埼」と呼んでいた可能性があろう。（注6）としている。

### 三、歌群の再編問題について

問題は⑤の「狭残」と示された行宮の地（6・一〇三二～三、題詞）の位置であるが、「狭残」の位置確認に入る前に、見ておかなければならない研究がある。この一連の歌群（一〇二九～一〇三六番歌）は、再編されたものであるという指摘が影山尚之氏や新沢典子氏によってなされている。影山尚之氏は、

各々の題詞には《行宮》+《作者名》+《作歌首》の項目を記す。事実を正確に記し留めようとの意図が働いていると受け取れる。ただ例外となるのはB（一〇三〇）・C（一〇三二）・G（一〇三五）歌であり、これらに《行宮》の項目が欠落している。うちG歌は前のF歌題詞に統括されていると判断できるから問題ないとして、前二首をこれと同様に解することはできない。

とし、この一〇三〇～一〇三一番歌については「左注の段階で既に疑義が示されている」と指摘し、左注の問題を提起すると共に、

C歌題詞に《作歌》でなく単に《歌》とのみあることにも注意しておきたい。他の題詞が、Bの「御製歌」を除けばいずれも《作歌》に統一されているのに対して、これも異例と言わねばなるまい。

として、

B・C歌は他の六首とは別の資料から出ているものとみなすことができそうである。

とした（注7）。新沢典子氏は、影山尚之氏の成果とは別個にほぼ同じ結論に気付き、

この歌群が、実際の作歌順を反映したものではなく、歌が行程に沿うように歌中の地名を手がかりに編者によって再編成されたものであることを示唆するものと見得る。

（注8）

と指摘した。

しかしながら、この影山尚之氏や新沢典子氏の研究によって、

「松原」（一〇三〇）……一志から安濃にかけの海浜  
「四泥能崎」（一〇三二）……四日市市大宮町志氏神社近傍  
という推考は大きくは変らないと考えてよい。と共に、「狭残」（一〇三三）の地は、「河口」（行宮）から「美濃國多藝」（行宮）

の間と推定域が広くなるということになる。

#### 四、「狹殘行宮」の地と「狹殘」の訓みについて

さて、⑤に「狹殘」と示された行宮の地は、これまでその地を比定出来ないうでいた。

まずこの「狹殘」の用字については、古写本各種に異動がなく、本文上は問題が存しないと認定してよい（注9）。

この一〇三二番歌題詞に見られる「狹殘」の地について、山中章氏は、久留倍遺跡こそ狹殘行宮の地で、それは朝明行宮の別名であるとした。

これまで「狹殘行宮」がどこにあるのかわからなかったが、久留倍遺跡に立てば遙か志摩の地までも眺めることができる。いや、ここ以外では海人が小船で行く風景を見ることは不可能である。久留倍遺跡こそ狹殘行宮（朝明行宮の別名）だったのではないのだろうか。（注10）

また岡田登氏は、歴史地名「佐々良井」（礪井）から、次のように考察した。

前述した寛政八年（一七九六）の『朝明郡内桑名藩領絵図』（図2…略）には、久留倍遺跡の北東に「大ヤチ出郷 礪井」があり、延元四年（一三三九）の『諸国御厨御園帳』には、「佐々良井神田」があり、また大矢知の字名に「礪井」（サザライ）があり、現在下さざらい町として名を留めている。

この「サザライ」は、狹殘（サザ）の地名に関わるものと考えられる。恐らく、大矢知の古名は「狹殘」で、出郷の「礪井」は大矢知（狹殘）村が朝明川に設けた井堰に由来した地名と考えられる。（注11）

これまで不明とされて来た「狹殘行宮」の地は、これで確定したと見てよい。久留倍遺跡そのものが「狹殘行宮」であるかどうかはさておいて、古名「狹殘」は現今の「下さざらい」に相当し、遡っては「佐々良井」（礪井）であると見られる。

となると、「狹殘」の訓みについて再考しなければならないことになってくる。

本居宣長は『地名字音轉用例』の中で、「ンノ韻ヲラノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例」として、「さらゝ 讀良」「はりま 播磨」「するが 駿河」「つるが 敦賀」「くるへ 訓覇」等の事例を挙げており、築島裕氏はこの宣長の著を引いた後に、「ンの韻尾を地名音の表記としたものとして、『播磨』『駿河』等の例を挙げつつ、韻尾 ンと韻尾 ヲ（ng）との別について言及している（注12）。

また大飼隆氏は、

八世紀初頭までの文献において、固有名詞の表記に陽声字（ン韻尾をもつ漢字）が用いられていたなら、二合仮名か連合仮名のいずれかの用法であると予想してよい。

とし、

（所収本、75頁）

漢字音の n 韻尾を日本語のラ行音にあてた表記は、ツルガの「敦賀」、ハリマの「播磨」、ヘグリの「平群」など、例が多い。

としている (注13)。

(所収本、71頁)

「殘」字は「韻鏡」の外転第二十三開の平声一等(齒濁音)に位置し、その韻尾は「n」音である(推定音は人により多少の出入りが存するが、*ɲaŋ* となる——注14)。よって、地名「狹残」の訓みは「さざら」となる可能性があり、前記岡田登氏指摘の延元四年(二三三九)「諸國御厨御園帳」(神宮文庫蔵、天正八年(一五八〇)写本、注15)には「佐々良井神田」(23丁表9、左記臨写、参照)とあり、「狹残」は「サザラ」という発音であつたと見るのが良い。「狹残行宮」は「さざらのかりみや」となる。第二音節の濁音についても、『韻鏡』の齒濁音と現在残る「下さざらい町」の濁音とが証しているよう。

### 朝明郡修良寺神田二

(右は廣岡の鉛筆臨写の画像取込)

これで長らく比定地不明であつた「狹残行宮」の概ねの位置とその訓みが明らかとなつて来た。

### 五、「御食國志麻乃海部有之」について

四日市市大矢知町に存する久留倍遺跡には、堀に囲まれた正

倉が存在すると共に(注16)、より早い遺構としての郡家(郡衙)が存した可能性が既に指摘されている(注17)。

この発掘地の台地は自然地形ではなく、恐らく役所区画を形成するために山嶺を切り取って開いた造成地に違いない。方位が東方を向くことが、所謂風水思想には合致しないが、三方を山に囲まれ、前方が豁然と開いた好地である(注18)。

小高いこの丘に登れば、前方(東方)には、伊勢湾の展望が開けている。『萬葉集』でいう「伊勢の海」とは、通常は伊勢南部から志摩地域を中心とする外海をさして言う(注19)。しかしこの一連の行幸では、そうした外海としての「伊勢の海」を臨み見るべくもなく、また歌中に「伊勢の海」の語も使用されていない。ただ「御食つ国志麻の海部有らし真熊野の小船に乗りて奥へ傍ぐ見ゆ」(6・1033)と海景が詠まれている。この歌に詠まれた「真熊野の小船」とは、「熊野諸手船」(神代紀下、第九段正文)をさすものと考えられ(注20)、その「真熊野の船」を造船する「猪名部の匠」を想起しての詠歌と考えられる。即ち、前方に伊勢湾の海景が展開し、かつは著名な猪名部氏を想起し得る地が、この大矢知町に存在する久留倍の丘陵に存した郡家の地であると言い得るであろう。

『萬葉集』巻第六の一〇三三番歌の詠作地は久留倍遺跡が存する朝明郡家の地であり、その所(あるいはその近傍)に「狹残行宮」は営まれたものであろう。

御食國 志麻乃海部有之 真熊野之 小船尔乘而 奥部傍



所見（6・1〇三三）

大伴家持は、小高い丘から海景を展望して「あれは御食国である志麻の海部であろう」と推定している歌である。小船に乗る海部という眼前に展開する景が「志麻の海部」であるという保証はこれといつてはないが、家持は歌に「志麻の海部」を詠みこみたかったのである。それ以上に明確でないのが、「真熊野の小船」ということである。「奥」（沖）の彼方を傍ぐ「小船」をどうして「真熊野の小船」（熊野タイプの船……熊野諸手船）と見得たのであろうか。当時の人々の視力が良いことは確かに違いないが、これはその詠作地とその近傍の員弁の地（注21）からの想起詠と考えられる。

即ち、この一首は、行程上やがて伊勢湾の光景が見られなくなるという「狭残」の地にあつて、沖合の彼方に点に近い姿で認められた小船の景を契機として、「真熊野之小船」を想起し、かつはその「真熊野之小船」を乗り回していた「御食國志麻乃海部」に思いを馳せた思念詠であるという結論になる。その背景には、「真熊野之小船」を造ることで名を知られていた「猪名部の匠」（注22）という地縁に基づいての詠歌と見るのがよい。

## 六、まとめ

以上、当論は、狭残行宮での大伴家持の萬葉詠中の第二詠を中心に据えて考察した。

「狭残」の地は、岡田登氏が指摘する延元四年（一三三九）の『諸国御厨御園帳』に見られる「佐々良」（礫）の地に相当し、現在は「四日市市下さざらい町」としてその名を残しており、「狭残」の訓みは即ち「さざら」となることを漢字音とその受容から明らかにした。「狭残行宮」の地は久留倍遺跡そのものであるかどうかは明らかにし得ないが、その可能性は大いにあると共に、或いは「狭残行宮」の宮地は久留倍遺跡の近傍の地であつたのかも知れない。大伴家持詠の二首が披露されたのは狭残行宮での宴においてであり（題詞）、その第二詠、

御食國志麻乃海部有之真熊野之小船小乗而奥部傍所見

（6・1〇三三）

の歌の景が形成されたのは、久留倍遺跡が存在する丘陵地の展望においてであると見てよい。

その歌詠は想念詠ながら、海の彼方に浮かぶ「小船」を「真熊野の小船」としているのは、その船を乗りまわすことで都に知られていた「御食國志麻乃海部」に思いを馳せてのことであり、かつは著名な（注23）その熊野タイプの船から地縁の猪名部氏に寄せてのものである。なお、影山尚之氏はこの歌が叙景歌であることを認めつつも、歌群構成に際しては持統六年の伊勢行幸が重ねられていたであろうということを指摘し（注24）、廣川晶輝氏は天武皇統讚美の性格を「御食つ國」の語から考察し（注25）、小野寛氏は「行幸從駕の天皇讚美と古代への回想」を読み取っている（注26）。そうした聖武天皇への思念が歌詠の

底に全く流れていないとは断言できないが、この一〇三三番歌は右に見た古代性からもたらされた叙景の歌である。森朝男氏は「奉仕者たちのふるまいを描く、という行幸歌の伝統的構図」によりながらも「遠景として詠まれるに過ぎない」として、「儀礼歌の体を一つ脱したおもむきがある」としている(注27)。前に位置する第一詠(6・一〇三三)と共に、狹残という行宮における宴での直叙歌であると見てよい。その大伴家持の第一詠についての考察は、次の機会に譲りたい。

### 【注】

- 1 仁藤教史氏「古代の行幸と離宮」『条里制・古代都市研究』第一九号、二〇〇三年二月。
- 2 瀧浪貞子氏「聖武天皇「彷徨五年」の軌跡」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』三号、一九九〇年。同氏『日本古代宮廷社会の研究』所収)。引用は所収本による。
- 3 吉井巖氏『萬葉集全注』(巻第六、有斐閣、一九八四年九月。文中の「考」とは、粕諸成編の『萬葉考』のことをいう。
- 4 『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』(天平十九年(七七七)二月十一日)『大日本古文书』(二) 六二四頁。(該当頁、六五四頁)。
- 5 廣岡義隆「吾乃松原」について」『三重大学教育学部紀要』三二卷二号、一九八〇年三月。
- 6 岡田登氏「壬申の乱及び聖武天皇伊勢巡幸と北伊勢(上)(下)」  
朝明郡家跡の発見を契機として」皇學館大學『史料』一九一〜一九二号、二〇〇四年六月八月。
- 7 影山尚之氏「聖武天皇「東国行幸時歌群」の形成」『解釈』三八卷八号、一九九二年八月。
- 8 新沢典子氏「巻六の配列意図 ―歌に示された聖武朝史―」(美夫君志会全国大会「発表資料集」(二〇〇四年六月二七日)による)。
- 9 『校本萬葉集』四(佐佐木信綱氏・橋本進吉氏・千田憲氏・武田祐吉氏・久松潜一氏編、一九三一年九月)及び『校本萬葉集』十三、新增補(佐竹昭広氏・木下正俊氏・神堀忍氏・工藤力男氏編、一九八二年三月)による。
- 10 山中章氏「聖武天皇の「朝明行宮」か」『京都新聞』二〇〇四年六月一〇日。
- 11 岡田登氏、注6に同じ。
- 12 築島裕氏「地名の漢字表記」『国語の歴史』第三章、東京大学出版会、一九七七年一月 四九頁。
- 13 大飼隆氏「万葉仮名の漢字音からの「離れ」」(同氏『上代文字言語の研究』笠間書院、一九九二年二月)第一部第二章。初発の『木簡研究』一一号(一九八九年一月)に加筆。
- 14 例えば、高本漢(Katzen)氏『中國音韻學研究』商務印書館、一九四〇年九月)はChan、平山久雄氏(「中古漢語の音韻」中国文化叢

書①『言語』所収、大修館書店、一九六七年一月）は dan、藤室明保氏・小林博氏共著の『音注韻鏡校本』（木耳社、一九七一年三月）は dan としている。

15 『諸國御厨御圖帳』——『國書總目録』には、神宮文庫蔵本しか登載されていない。冒頭に「給人引付諸神領事（一ウ）」とあり、「伊勢國」の「度會郡」以下各郡及び各国の御厨からの米（麦）の石斗と御園の石斗及び菓子等が明記された後、「諸郡祭料」「諸郡祭料」「諸神戸祭料」が明記され、ついで示される「渡神田」条の末尾に「朝明郡佐々良井神田二町 上分二斗」とあり、その後「諸嶋々」条の御厨が示されて「右注進如件」（23ウ10）で結ばれ、次行に「延元四年十月日」（24オ1）の期日が明記されている（延元四年は二三三九年）。この神宮文庫蔵本（一門三六八一号）一冊は天正八年（一五八〇）の写（大尾、26ウ）で、特殊本扱いとなっている。別に明治二十四年十月の写本（一門七三一四号）も同文庫には蔵されている。

16 「寔（胡官反。垣也。院字）」『篆隸萬象名義』三帖六二ウ）とあるように、垣で囲まれた建造物は「院」と呼ばれ、その意味での「正倉院」であると言つてよい。

17 『北勢バイパス発掘調査ニュース』第二号（四日市市教育委員会事務局文化課、二〇〇四年二月）。

18 『続日本紀』和銅元年（七〇〇）二月戊寅（15）条の「平城遷都の詔」の中に、「方今、平城之地、四禽叶圖、三山作鎮、龜筮並從」というの表現がある。

19 大養孝氏『万葉の旅』中（社会思想社、一九六四年七月）。

20 廣岡義隆「狹殘」（『東海の万葉歌』おうふう、二〇〇〇年七月）。

21 『大日本古文書』には次のような例がある。「伊勢國員辨郡笠間郷戸主猪名部美久」（天平十六年（七四四）十一月九日「優婆塞貢進解」正倉院文書、『大日本古文書』二二〇三六〇頁）／「伊勢國陸伯陸拾貳町 員辨郡宿野原伍伯町下略」（天平十九年（七四七）二月十一日「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」、『大日本古文書』二二〇六五二頁）。

22 「猪名部の匠」については、『日本書紀』の応神紀三十一秋八月条や雄略紀十三秋九月条に逸話が見られる。『新撰姓氏録』には、以下のように出ている。

猪名部造 伊香我色男命之後也（左京神別上）。

爲奈部首 伊香我色平命六世孫金連之後也（未定雑姓 撰津国）。

爲奈部首 出自百濟國人中津波手也（撰津国諸蕃）。

\*佐伯有清氏『新撰姓氏録の研究』（考證篇第三、第六、第五）参照。

「また伊勢國員弁郡の地名は、猪名部が設置されたことにもとづくものであることは、員弁郡の人、猪名部文麻呂（『続日本紀』神護景雲三年五月癸未条）・猪名部造財鷹（『三代実録』貞観十二年二月十九日辛丑条）らの存在によつて、それが知られる。」（佐伯氏『新撰姓氏録の研究』考證篇第三、八七頁）

23 山部赤人は瀬戸内の辛荷島（兵庫県相生市の南方）<sup>からいしま</sup> 辺りで、「真熊野之船」を歌に詠み（巻6・九四四）、「伊予国風土記」にも「熊野<sup>よ</sup> 云船」

の例が出る（逸文、『釈日本紀』卷八）。廣岡義隆「熊野船」（『金雀枝』

二〇〇二年三月号）、参照。

24 注7の影山尚之氏の論に同じ。

25 廣川晶輝氏「聖武天皇東国行幸從駕歌論」（『国文学言語と文芸』一五号、一九九八年二月）。

26 小野寛氏「聖武天皇関東行幸の時の歌八首」（『駒澤國文』三八号、二〇〇一年二月）。

27 森朝男氏「伊勢国行幸從駕の歌」（セミナー万葉の歌人と作品、第八卷『大伴家持（一）』和泉書院、二〇〇二年五月）。

\* 当稿は、二〇〇四年八月七日に三重大学を会場として開催された第三回「考古学研究会東海例会」において発表したものをベースにしてまとめなおしたものであり、伊勢湾文化資料研究センターにおける共同研究の一環として位置付けられるものである。

\* 久留倍遺跡は、国道一号線北勢バイパス工事に関わる発掘によって、その一端が明らかとなり、山中草教授をはじめとする保存運動において景観保全を含めての保存（トンネル工法による景観保全）を訴えて来たが、高架工法による遺跡の保存がはかられようとしている。景観も含めた完全保存とは言い難く、とても残念であるという思いを抱いている。

「ひろおか よしたか 本学教員」